

AnavataptagAthA の釈尊の業の残滓を説く因縁話の 形成

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院

<https://hdl.handle.net/2324/1868093>

出版情報 : 論集. 33, pp.73-93, 2006-12-25. 印度学宗教学会
バージョン :
権利関係 :

Anavatapta-gāthā の釈尊の業の残滓を説く因縁話の形成

岡 野 潔

印度学宗教学会 論集 第33号別刷

平成18年

Anavataptagāthā の釈尊の業の残滓を説く 因縁話の形成

岡 野 潔

この論文は Anavataptagāthā 関係諸文献の研究序説というべきものであり、扱う資料としては次のものがある：

- (1) Anavataptagāthā (略号：A) の末尾にある第37、「如来の章」Tathāgata-parivarta (略号：AT)
- (2) パーリ Apadāna の387 pubbakammapiḷoti (buddhāpadāna) (略号：P)
- (3) 興起行経, 大正No.197
- (4) 五百弟子自説本起経, 大正No.199 (略号：五百弟子)
- (5) チベット訳『有為無為決択』の第32章中の「仏陀の16業の連繋」の正量部説の引用 (略号：正量部伝承)
- (6) Bodhisattvāvadānakalpalatā 第50章 Daśakarmaplutyavadāna

(1)～(4)の韻文の形成を本論文の第1～7節で考察し、次に散文部分の形成を第8～9節で考察する。(5)に関しては、別の論文で正面から扱う予定である。

1. 四つの韻文テキストについて

小乗諸部派が分立した時代に成立した韻文作品 Anavataptagāthā (無熱惱池偈頌) の Tathāgataparivarta (如来の章, de bzhin gshegs pa'i le'u) は釈尊自らの前世の業の残滓が今生に及ぼした因縁話を物語る。「如来の章」を略号として AT と呼ぶ。AT は10の前世と今生の話から成り、内容は以下のとおり：

AT 1 前世：悪党ムリナーラは辟支仏スルチを咎がないのに誹謗した。縛られ町中を曳かれてゆく聖者を見て彼は憐れみを生じ、自首した。→現世：スندگانリーのために、釈尊は咎もないのに外道たちに誹謗された。[智度論に無い]； AT 2 前世：五百の弟子の師であるバラモンは五通仙人に対し「この仙人は愛欲の享楽者だ」と誹謗をした。弟子

たちは喜び、その噂を世間に広めた。→現世：釈尊と五百人の比丘はスングリーによって誹謗された。[智度論：一者、梵志女孫陀利誹謗、五百阿羅漢亦被誹。]； AT3 前世：男は一切勝という仏の弟子ヴァシシュタを嘘で誹謗した。→現世：チャンチャー・マーナヴィカーによって、咎もないのに誹謗された。[智度論：二者、旃遮婆羅門女、繫木孟作腹誹佛。]； AT4 前世：男は財産のゆえに、異母弟を山に連れてゆき岩で突き殺した。→現世：デーヴァダッタに岩を投げられ、岩の破片が足の親指を傷つけた。[智度論：三者、提婆達推山壓佛、傷足大指。]； AT5 前世：貿易商は航海中に、船上で別の貿易商を槍で刺し殺した。→現世：釈尊の足に木片が突き刺さった。[智度論：四者、迸木刺脚。]； AT6 前世：漁師村で漁師の子は、魚が殺されるのを見て喜んだ。→現世：ヴィルダカ王が釈迦族を殺戮した時、釈尊に頭痛があった。[智度論：五者、毘樓璃王興兵殺諸釋子、佛時頭痛。]； AT7 前世：男はヴィパッシン仏の弟子たちに米を食うな、麦を食えと罵った。→現世：バラモンに招かれてヴァイランパで安居した三月間、粗末な麦を食べた。[智度論：六者、受阿耆達多婆羅門請而食馬麥。]； AT8 前世：医者は下痢の病で苦しむ資産家の息子に不正な薬を与えた。→現世：釈尊は下痢の病をもつ。[智度論に無い]； AT9 前世：力士は相撲で、ある力士を殺した。→現世：釈尊は背中の中の痛みをもつ。[智度論：七者、冷風動故脊痛。]； AT10 前世：バラモン青年ウツラは陶師ナンディパーラに、『私は禿頭に会う必要はない、その者に悟りはない』、と仏を罵る言葉を使った。→現世：釈尊はウルヴェーラーで六年間苦行し、大苦を味わった後に、悟りに達した。[智度論：八者、六年苦行。]； 追加：*AT11 (注意：中央アジア断片写本のみに存する) 前世：乞食する辟支仏の鉢を地にたたき落とした。→現世：シャール村で鉢が空のままとなった。[智度論：九者、入婆羅門聚落乞食不得、空鉢而還。]

以上の内容をもつ AT と、その並行文献たるパーリの P と、興起行経(散文と韻文から成る)の韻文部分と、五百弟子(韻文のみ)の、4本の韻文テキストは、相互比較により、文が類似する「共通部分」を取り出すことが可能である。それらのテキストのうち、AT と五百弟子と興起行経は有部系のグループに属していたと思われる。また P も、起源的に有部系とは無関係ではないから(後述)、相互に類似するのも不思議ではない。

A の全テキストは薬事にあるが、根本有部毘奈耶薬事を漢訳した義浄は *Anavataptagāthā* (略号：A) の箇所を訳さなかったもので、チベット訳薬事から知られる。梵文は断片のみ有る。根本有部の A、特にその「如来の章」(AT) のテキスト伝承を、有部内の所属系統で区別する必要がある場合、以下に中央有部韻文と呼ぶことにする。中央有部(いわゆる根本有部)と西北有部(カシュミール・ガンダーラ有部)は同じ有部系であっても聖典伝承を論じる場合には区別されるべきであり、BECHERT (1961) も A の伝承を論じるにあたって、二系統の

違いを問題にしている (S.31)。有部の聖典伝承が本当はいくつの系統に分かれていたかは不明であるが、少なくとも二大系統を区別できるのは確実であり、二大系統の一方の側に中央有部の伝承が含まれ、他方の側に西北有部の伝承が含まれると考えられる。西北有部の伝承を伝える A としては、中央アジア出土のわずかな梵文断片があるが、その断片において、**中央有部韻文**との相違が指摘できる。また大智度論の記述からその存在を推測できる有部 AT の伝承も、西北有部の伝承を伝えるものと思われる。

2. 空鉢因縁話をめぐる有部伝承の違い

西北有部の AT の伝承を伝えるものとして、BECHERT (1961) が発表した東トルキスタン出土のわずかな梵文断片としての AT があり、また大智度論の「仏陀の九罪報」がある。大智度論の「仏陀の九罪報」の記述は簡略であるが、それから当時の有部 AT の伝承が推測できる。智度論が伝える有部の伝承が西北有部系であるという根拠は、E. LAMOTTE の智度論研究に依る。LAMOTTE は智度論の作者がカシュミラ・ガンダーラの有部に 3 世紀末から 4 世紀初めに属し、その部派の伝統に基づいて教理の記述をしたという結論を得た (ラモット (1978), 2-3 頁)。西北有部の伝承は**中央有部韻文**の伝承と大部分が共通する。しかし重要な相違点は「sāla 村で托鉢したが、釈尊の鉢は空のままであった」という 1 話 (空鉢因縁話) (*AT11) を**中央有部韻文**では欠くことである。東トルキスタン出土梵文写本と大智度論にはその空鉢因縁話がある。

中央有部韻文は10の因縁話 (AT1~10) から成る。それに対して、東トルキスタン出土断片梵文 AT (西北有部系) には空鉢因縁話が最期に (第11話の位置に) 付いていたことを BECHERT (1961) が報告した (S.241, 10a)。空鉢因縁話があることが、西北有部の韻文の伝承の特徴と考えられる。

ただしこの空鉢因縁話をめぐる有部内の韻文伝承の差異は、韻文の時代の後の、散文形成の時代には解消された。韻文に遅れて散文部分が形成された時、中央有部は散文部分に空鉢因縁話を加えた。根本有部毘奈耶薬事には AT 韻文の前に、同じ内容の散文部分 (漢訳とチベット訳がある) が置かれており、それ

を以下に**中央有部散文**と呼ぶが、その散文には空鉢因縁話 (M3) が入っている (それが散文にあって韻文に欠けていることは、散文が韻文より新しいことを示唆する)。西北有部の韻文における空鉢因縁話の付加は、ちょうど中央有部の散文における空鉢因縁話の付加と符合するから、この付加は、**中央有部散文**と西北有部の韻文の、どちらかがどちらかに影響を与えたことを推測させる。その点で両者の付加は同時代的であり、共に**中央有部韻文**より新しいと思われる。**中央有部散文**は、**中央有部韻文**よりも実質的に1話増やししながら、しかも形式的に「10話」という古い枠組を守ろうとしたために、第5話において一つの現在物語に対して過去物語が二つあるという、無理をした形に再編集されている。

なお興起行経の韻文・散文と五百弟子には、空鉢因縁話の付加が無い。もし空鉢因縁話があることが西北有部系の最大の特徴なら、興起行経韻文は西北有部系ではないことになる。すると興起行経韻文は本来中央有部系であったがそこから分岐して、その後散文も加え、独自の成長を遂げて出来た作品である可能性が考えられる。

大智度論の仏陀の九罪報の記述は、有部の韻文 AT の伝承を考察するための最も古い資料であるが、次のように簡略に説かれる (その文中にすでに空鉢因縁話が見られることは注意されるべきである) : 問曰。若佛、神力無量、威徳巍巍、不可稱説、何以故受九罪報。一者：梵志女孫陀利謗、五百阿羅漢亦被謗。二者：旃遮婆羅門女、繫木孟作腹、謗佛。三者：提婆達推山壓、佛傷足大指。四者：逆木刺脚。五者：毘樓璃王興兵、殺諸釋子、佛時頭痛。六者：受阿耆達多婆羅門請、而食馬麥。七者：冷風動故脊痛。八者：六年苦行。九者：入婆羅門聚落、乞食不得、空鉢而還。(T XXV, 121c 7-15)

この九罪報の話の内容および順番から、智度論の作者の龍樹が当時の有部所伝の韻文 AT を知っていたことは確実である。智度論は省略した語り方をして、釈尊の罪報の今生話だけを九つ語るが、当時の伝承に今生話しか無かったわけではあるまい。今生話は当時でも前世話とペアになっていたはずである。智度論当時の韻文 AT は9話 (今生話9 + 前世話9) を有していたと考えられる。その9話の内訳は、**中央有部韻文**10話の中の2話 (AT 1 と 8) を欠いた8話 (AT

2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10) に、西北有部特有の空鉢因縁話を加えたものである。それら8話が、有部の現存する資料から遡りうる最古のコア部分であり、その韻文のコア部分の伝承に韻文2話を加えて**中央有部韻文**が成立したと思われる。

もし韻文 AT の原初形に、智度論にあるように空鉢因縁話があったなら、中央有部ではわざわざその空鉢因縁話の箇所だけを削り取ることはしないであろう。つまり韻文は初めに空鉢因縁話が欠けている形（8話から成るコア部分）が出来た。その韻文を最初に作ったのはどの有部かはわからないが、中央有部には空鉢因縁話の付加がない原初形が伝えられ、その原初形に2話（AT1と8）が付加された。西北有部の韻文においては智度論のように、2話（AT1と8）が付加される前から空鉢因縁話が付加された形で伝えられ、後から2話が付加されたと推測される。韻文より成立が遅れる中央有部散文においては、先行する中央有部韻文の10話に——西北有部の影響か？——空鉢因縁話が補われた。

以上の有部の諸伝承の相違をもう一度まとめてみると、智度論の九罪報では空鉢因縁話を含む9業の連繫が説かれるのに対して、**中央有部韻文**では空鉢因縁話を含まない10業の連繫（今生話10+前世話10；ただしAT1とAT2の今生話は重複する）が説かれる。東トルキスタン出土断片写本から知られる西北有部伝承では**中央有部韻文**の末尾にさらに空鉢因縁話の1話（AT11）が加わる（断片写本であるため全体の姿は知りえないが、合計11の業の連繫があったと見るのが自然である）。また**中央有部散文**には11業の連繫（今生話10+前世話11）がある。

Aの「如来の章」の話は智度論では「九罪報」と呼ばれているが、その後の時代に、計10話から成ることが枠組として確定し、「10業の連繫」(daśakarmapluti)と呼ぶ伝統が有部で出来たらしい。**中央有部散文**を直接の源泉資料として用いた Kṣemendra は、Avadānakalpalatā 第50章の章名を「10業の連繫のアヴァダーナ」Daśakarmaplutyavadāna と名づけている。有部以外の部派では、10という数にこだわらず前世の業の連繫を数える。正量部では16である。

智度論以後に固まった有部韻文の基本形は10の業の連繫であったが、**中央有部散文**で11の業の連繫になっているのは、1話（空鉢因縁）の付加がなされた

ためであるが、その際に「10業の連繫」という基本の枠組の中に11の前世話が有る不都合をうまく処理するために、中央有部散文はその第5話(M5)において、一つの今生話に対して二つの前世話を貼り付けるという工夫をしている。また中央有部韻文ではAT1とAT2の今生話が同じ「スングリーの誹謗」であるという重複の欠点があったが、中央有部散文ではその重複を整理し、一つに削ったため、今生話の数を11ではなく10に収めることが出来た。つまり、中央有部韻文の内容に1話を付加し、同時に今生話を再整理することで、中央有部散文の内容が出来たと理解することが出来る(このことは韻文の方が散文より一段階古い証拠となる)。

3. パーリ上座部の伝承について

パーリ上座部は他部派、恐らく有部からAの詩節群を取り入れて、パーリ Apadāna を作った。特にAの「如来の章」は Apadāna の Pubbakammapiḍḍi (略号:P) とよく類似する。BECHERT (1961) によればPを作る際にスリランカ上座部がインドから輸入したのは、中央有部系の伝承である(S.32)。その根拠は、第一に、西北有部の伝承(智度論、中央アジア写本)が有する空鉢因縁話が、中央有部系の伝承には無かったため、それはパーリ上座部のPにも伝わっていないこと、第二に、智度論(西北有部の伝承)に欠けているが中央有部の伝承には存する「ムリナーラが辟支仏を誹謗した話」(AT1)が、パーリ上座部のPに伝わっていることである。

Pの内容は次のとおりである：

P1 前世：悪党ムナーリは辟支仏スラビを咎がないのに誹謗した。→現世：釈尊はスングリーによって咎もないのに誹謗された。； P2 前世：男は一切勝という仏の弟子ナンドを誹謗した。→現世：チンチャーによって咎もないのに誹謗された。； P3 前世：五百の弟子の師であるバラモンは五神通をそなえた仙人に対し「この仙人は愛欲の享楽者だ」と無根拠な誹謗をした。五百弟子たちは喜び、その噂を世間に広めた。→現世：釈尊と五百の比丘はスングリーによって咎もないのに誹謗された。； P4 前世：男は財産のゆえに、山の崖から異母弟を投げ落とし、岩で砕いた。→現世：デーヴァダッタに岩を投げられた。岩の破片が足の親指を砕いた。； P5 前世：大道で遊ぶ子供は辟支仏がやってくるのを見て道に破片を置いた。→現世：デーヴァダッタに遣わされた暗殺者

に命をねらわれた。； P6 前世：象乗りは町を托鉢して歩く辟支仏を攻撃した。→現世：ギリッパジャの町でナーラーギリという狂象に襲われた。； P7 前世：貿易商 (satthako) の長 (rājā) は槍で人を殺した。→現世：カディラの木で足の皮を傷つけた。； P8 前世：漁師村で漁師の子は魚が殺されるのを見て、喜んだ。→現世：ヴィドゥーダバ王が釈迦族を殺戮した時、釈尊に頭痛があった。； P9 前世：男はブッサ仏の弟子たちに、米を食うな、麦を食えと罵った。→現世：バラモンに招かれヴェーランジャーに居た時に三月間麦を食べた。； P10 前世：力士は相撲で、ある力士を害した。→現世：釈尊は背中の痛みをもつ。； P11 前世：医者 は資産家の息子にわざと下痢をさせた。→現世：釈尊は下痢の病をもつ。； P12 前世：ジョーティパーラはカッサバ仏に、どうして最高に到達し難い悟りが禿頭の坊主にあるのか、と罵った。→現世：ウルヴェーラーで六年間苦行し、苦しんだ後に、悟りに達した。

パーリ上座部は初期の有部韻文 (空鉢因縁話がない10話) を取り入れ、その作品をパーリ語化し、同時にパーリ上座部の伝承に適合するように固有化する作業、「パーリ上座部化」を施した。詩節中の固有名詞等はその時にパーリ聖典の伝統に合うように変えられた。その結果として現在の P のテキストが出来たと考えられる。かなり新しい時代にタイ版の P においてはさらに1話 (仏陀が喉が渇いているのに水が飲めなかった前世の因縁) が付け加えられ (BECHERT (1961), S.210), パーリ上座部内での伝承の固有化はさらに進められた。このような固有化はパーリ上座部内ばかりでなく、他の上座部系部派でもあったらしい。正量部の「仏陀の16業の連繫」の伝承を見ても、恐らく有部の A の「如来の章」をベースにして、自己の部派特有の固有化、付加・改変をしたと判断できる。

パーリの伝承には、中央有部韻文にもない独自の話が2話あり、それらはパーリ上座部内で付加された可能性が高い。その2話とは「デーヴァダッタに遣わされた暗殺者に命を狙われた」事件と前生話 (P5), また「ギリッパジャの町でナーラーギリという狂象に襲われた」事件と前生話 (P6) である。ただし狂象に襲われた事件は正量部伝承 (Pより成立が新しい) にも出てくる。

「パーリ上座部化」の結果、現在の形になったアパダーナ P にも、有部阿含の伝承の名残を指摘することができる。第12話 (P12) のカーシャバ仏に語った言葉、『最高に得難い悟りが禿頭の者にどうしてありえようか』の文句は、有部の阿含経の伝承とよく一致するが、パーリ聖典の伝承 (MN No. 81, PTS ed. II, p.46) の文句、『その禿頭の修行者と会ってなんになるというんだ』、とあまり

一致しない。このこともこの作品が本来パーリ上座部の内部で作られたものではない証拠となる。

パーリ P の全体の話の順番に着目して比較すると、パーリの話の順番 (P 1 ~12) は、**中央有部韻文** (=五百弟子) の順番 (AT 1 ~10) に一番よく合っており、**中央有部散文**や**興起行経韻文**・**散文**の順番とは合わない。正量部の「**仏陀の16の業の連繫**」の伝承とも合わない。このことも、**有部韻文**とのパーリ伝の密接な関係を証明する。なお P の話の順番は Apadāna-aṭṭhakathā (pp.114-127) では違っているが、その相違はパーリ上座部内部の問題であろう。

さて、BECHERT (1961) によれば有部 A の第37の「如来の章」つまり buddhāvadāna の韻文だけが、パーリ上座部に採用されて Apadāna に組み込まれたのではない。アパダーナという作品においては有部 A と直接的な貸借関係にある箇所は他にもある。BECHERT の綿密な有部 A のパーリ文との対照研究によれば、「如来の章」の前にある sthāvīrāvadāna の箇所でも、分量としては少しではあるが確実なパーリ文との貸借関係が指摘しうる：

BECHERT, S.196 ff. XXXV Prabhākara ⇔ Apadāna 333 Pabhaṃkara

BECHERT, S.118 ff. VI Koṭṭivimśa ⇔ Apadāna 386 Soṇakoṭivīsa

これらの文面を比較検討した BECHERT は、パーリのアパダーナにおける有部 A からの借用は、中央有部のリセンションを用いてなされたのであり、西北有部のリセンションではない、と結論づけた (S.32)。

4. 四つの韻文テキストの形成過程について

四つの韻文テキスト、すなわち**中央有部韻文**とパーリ韻文と**五百弟子**と**興起行経韻文**を綿密に比較するなら、韻文の原初形がどのような形で出来て、どのように発展したのかがわかる。4本のテキストの比較はまた最古の有部韻文の姿を知るためにも必要である。3本の有部系統のテキスト、すなわち**中央有部韻文**と**興起行経韻文**と**五百弟子韻文**の三者の韻文がよく共通する部分は、三者が分岐する前の形を示すものであろう。さらに、その有部系統の分岐する前の最古の姿よりもさらに一段階前の姿を、パーリの伝承を比較に加えることで、

窺い知ることができる。

4本の韻文テキストの比較するための基本資料は、すでに BECHERT (1961) が作ってくれている。彼の本の212頁から243頁にかけて、見開きの左右2頁で、パーリ文、葉事の韻文のチベット訳文、そして興起行経の韻文部分と五百弟子韻文のドイツ語訳、という四つのテキストが、特に対応する詩節どうしが隣り合うように配慮されて、うまく並べられた。その作業によって、それら4本の韻文テキストの間には明らかな対応関係が有ることが示された。4本の韻文テキストがうまく横に並んでいる箇所、つまり共通部分は、作品の中核を成している最古の原形部分を意味し、それ以外の部分は、伝承が分岐した後に付加や改変が個別的に起こった部分であることを意味する。

もし系統樹を作れば、中央有部韻文と興起行経韻文と五百弟子の三者は大まかに一つのグループを形成して、それはパーリ伝承の枝と対峙するもう一本の枝となろう。そのグループの三者のうちで、最も付加された偈が多いのが、興起行経韻文である。中央有部韻文と五百弟子は実によく一致する。五百弟子は漢訳の末尾がなぜか数行分欠けてしまっており、またあちこちに明らかな誤訳が見られるが、原文は中央有部韻文とさほど変わらないものであったとみてよい。ただし五百弟子の方が若干の箇所やや新しさを感じさせる。

最も増広した形を示す興起行経韻文に対し、中央有部韻文(=五百弟子)とパーリ韻文は、付加が少なく古いかたちをよく保っている。中央有部韻文とパーリ韻文とが逐字的に合致する箇所は疑いなく両者の同一の源泉に遡る。しかしその両者が違っている箇所については、どちらがより古い形であるかを、1詩節ごとに注意深く比較しながら判断してゆかねばならない。

5. 中央有部韻文がパーリよりも増広している例

中央有部韻文とパーリ韻文Pのテキストを比較してみると、前者が2偈で表現しているものを後者は1偈で表現している場合がある。これは後者の1偈がもつ四つの pāda を工夫して八つの pāda に増やすという方法を取ることで、前者は後者の1偈をうまく2偈にしているのである。それについては明白な例

を六つ挙げることが出来る。

それは以下の通り：(1)パーリ本 P の第16偈の 1 偈に対応するものは、中央有部本では第696, 697偈 (BECHERT の四本対照表, S.222) の 2 偈であるが、詳しく見てみると、中央有部本の696bcd と697a の四つの pāda が付加されて、1 偈が 2 偈にされたことがわかる。(2)パーリ第24偈の 1 偈に対応するものは、中央有部本では第701, 702偈の 2 偈である (S.230)。中央有部本の701bcd と702a の 4 pāda が付加されて、1 偈が 2 偈にされた。(3)パーリ第26偈の 1 偈に対応するものは、中央有部本では第704, 705偈の 2 偈 (S.232)。704acd と705a の 4 pāda が付加されて、1 偈が 2 偈にされた。(4)パーリ第28偈の 1 偈に対応するものは、中央有部本では第706, 707偈の 2 偈 (S.234)。706cd と707bc の 4 pāda が付加されて、1 偈が 2 偈にされた。(5)パーリ第27偈の 1 偈に対応するものは、中央有部本では第708, 709偈の 2 偈 (S.236)。708ab と709bc の 4 pāda が付加されて、1 偈が 2 偈にされた。(6)パーリ第30偈の 1 偈に対応するものは、中央有部本では第711, 712偈の 2 偈 (S.238)。711acd と712a の 4 pāda が付加されて、1 偈が 2 偈にされた。

つまりこれらの六つの事例では、どれも同じやりかたで 1 偈を 2 偈にする増広が施されている。これらではパーリ本の伝承の方が明らかに偈の古い形を示している。これらの増広を取り除くことによって、有部の韻文は、もう一段階古い形に戻すことができよう。このやりかたによる偈の pāda の増広は**中央有部韻文**と**興起行経韻文**と**五百弟子の三者の「有部グループ」**に共有されている事実に注意する必要がある。この事実は特に興起行経韻文の位置を決定するために極めて重要である。

パーリ本 P は、有部の韻文がある時期にパーリ上座部へ輸入されてパーリ語化されたものであると BECHERT は推測するが、その時スリランカに輸入された有部 AT は、現在の**中央有部韻文**そのものではありえない。その一段階前の (上述の六つの事例の増広がなされていない状態の) 古いヴァージョンであった。その古い有部本を Ur-P と呼ぶなら、それは全体としてはすでに現在の**中央有部韻文**と同じく10話から成るものであったと推測される (つまり智度論の「九罪報」よりも発達した「10話」の枠組の段階の有部テキストであった)。ただし現在のパーリ本 P は12話から成っており、**中央有部韻文**と**興起行経韻文**と**五百弟子の三者の韻文**が共通している10話という枠組に対して、余計な 2 話 (P5 と P6) が付いている (タイ版ではさらに 1 話増えて13話となる)。その 2 話はパーリ上座部独自のもので、パーリ上座部の内で或る時代に付加されたものであり、有部

から輸入した時の Ur-P には無かったと思われる。

またその Ur-P の段階ではまだかなり俗語性が強いテキストであった可能性もある。有部は古い時代には俗語を用い、地方語から梵語への切り替えを一挙に果たしたわけではなかった。その俗語の綴りがさらにパーリ語化される時に、後の梵語化された有部伝承との語形の隔たりがいつそう大きくなったと考えられる。AT 1 の辟支仏の名 *suruci* に対してパーリ P 1 では *surabhi* という語形、また AT 7 の地名 *vairambha* に対してパーリ P 9 では *veramjā* (v.l. *verajjā*) という語形を示す。

6. 興起行経韻文と五百弟子自説本起経と AT の関係

興起行経韻文と五百弟子と中央有部韻文は、10話構成という全体の枠組が共通する。三者は有部グループであり、有部の同一の源泉 (Ur-AT) から出た。その三者を比較すると、付加が少ないのが中央有部韻文と五百弟子であり、それら二者は極似し、興起行経より Ur-AT に近い形を保っている。興起行経韻文は早い時期に Ur-AT から分かれ出たが、三者共通のベース部分に付加した独自の詩節・パーダを多数有する。興起行経韻文には、各話ごとに「因縁終不脱」の句で始まる同じ様な詩節・パーダが付加され、各話で歌のリフレーンのように繰り返されている。それが詩節増加の原因である。

五百弟子は、内容を見てもまた話の全体の順番を見ても、中央有部韻文と極めて近い関係にあるので、五百弟子がいわゆる根本有部 (根本有部律を有する有部) の伝承に属することは確かと思われる。興起行経は部派不明である。

興起行経韻文と五百弟子と中央有部韻文のそれぞれは、Ur-AT から分かれ出たものであって、その前の段階の、パーリ本 P 韻文の源泉としての有部 Ur-P (上述) から直接分かれ出たものではない。Ur-AT と Ur-P を分かち相違点の最も確かなものは、1偈を2偈にするやり方 (上述) で増広を施しているか施していないかという点である。またこの有部系三者には空鉢因縁が無いことが共通しているが、その事は、有部系三者の源泉である Ur-AT は西北有部系統ではなく中央有部系に属することを推測させる。

形成の図式：

Ur-P → Ur-AT → 有部系三者 (AT, 五百弟子, 興起行経韻文)

この図式の Ur-P のさらに前に位置するのが、智度論の「九罪報」の中の(空鉢因縁を除いた) 8話の記述の原資料としての AT (現存しない) である。それを原型 (Archetype) あるいは Ur-Ur-P と呼ぶと、その8話から成る最初の「コア」が、時代とともに加増されてゆき、中央有部では10話の枠組になり (東トルキスタン有部では空鉢因縁を加えて恐らく11話)、パーリ上座部ではさらに2話付加されて12話の枠組になり、正量部では16話の枠組となった。

東トルキスタン有部の断片写本の伝承は、中央有部伝承の AT か Ur-AT に空鉢因縁を付けた形と単純にみなしてよいのか、それとも Ur-Ur-P に空鉢因縁を付けた「西北有部原初形」から直接発展した形なのかはわからない。判断を下すためには、発見された断片が少なすぎる。

全体の10話の順序に注目すると、興起行経韻文は中央有部韻文 (= 五百弟子) と話の順序が全く違っている。興起行経より中央有部韻文の順序の方が古く、本来的であると思われる。なぜなら中央有部韻文の方が、智度論の九罪報の順序やパーリの伝承の順序と一致するからである。

7. 興起行経韻文について

興起行経は後漢の康孟詳の訳とされているが、道安録にないので、それは疑わしい。訳文をみても、古訳ではない。僧祐の時代までに訳されたことがわかっている (出三蔵記集で新集統撰失訳雑経録、有本に分類)。恐らく5世紀頃に訳されたのであろう。原本は恐らく4世紀頃、つまりインドではほぼ根本有部律と同じ頃に成立したと思われる。

興起行経の韻文には(1)空鉢因縁話が欠けていること、(2)智度論にはない「ムリナーラが辟支仏を誹謗した話」(AT1)があることが指摘できるから、本来は中央有部系であると推測されるが、その後中央有部の外に出て、どこかの部

派で独自の発展の道を辿った可能性が高い。

興味深いことに興起行経韻文には、五百弟子と中央有部韻文に見られる有部伝承よりもむしろパーリ伝承との近さを感じさせる事例を2例ほど指摘できる。

事例1：中央有部韻文第3話(AT3)を見ると、一切勝仏の弟子の名は*Vasiṣṭha (gnas 'jog)であり、五百弟子でも(「和世吒」)、中央有部散文でもそれを確認できる。しかしパーリ伝承(P2)では弟子の名はNandaである。興起行経韻文では、その弟子の名が「多歡」という名前になっている。その原語はVasiṣṭhaではなくむしろNandaであったと思われる。

事例2：中央有部韻文第10話(AT10)ではバラモン青年の名前が挙げられていないが、他の有部伝承を見てみると、その名前はUttaraであり、それは五百弟子でも、中央有部散文でも確認できるが、パーリ伝承(P12)ではバラモン青年の名前はJotipālaで、有部伝承と全然違う。興起行経韻文では、青年の名が「火鬘」(skt.*jyotirmālāのbahuvrīhi男性*jyotirmāla = pa.*jotimāla ≠ jotipāla)という名になっており、有部のUttaraよりもパーリ伝承に近いことは明らかである。

しかしこのような指摘が出来るからといって、興起行経が有部系の伝承ではないと判断するのは、テキスト全体から受ける印象に反する。興起行経がパーリ伝承との近さを感じさせるような事例は、むしろ梵語化が始まる前の古い時代の有部伝承の中にあつた「伝承の横揺れ」をそのまま残しているためではないかと私は考える。つまり有部の言語的伝承にも新古の層があり、興起行経は古層の言語的特徴を残す伝承から分出して成長した作品であるため、五百弟子や中央有部散文に代表される新しい伝承にかき消されてしまったパーリ伝承との類似点を、少し残しているように思われる。

8. 散文部分の形成

次に散文部分を検討する。Aは最初に韻文だけの作品として作られたが、特に「如来の章」(AT)は重要なため、部派によっては散文が形成され、後から付け足された。作品に散文部分を有するのは、根本有部毘奈耶薬事と興起行経である。その2本の散文テキストを比べると、韻文の4テキストにおいて見られたほどに、両者は一致しない。

散文部分は本文の韻文に付随する形で、註釈あるいは教授における口頭の解説として形成されたと思われる。韻文は本来は経ではなかったが、やがて仏説

と認められ、聖典と同等あるいはそれに準じる扱いを受けた。その韻文の本文を解説する散文部分がやがて聖典の本文へと昇格して、葉事に見られるように、韻文と並置される形になり、また、興起行経に見られるように、1話ずつ散文と韻文を混ぜた形にもなったのであろう。葉事においては、中央有部韻文 ATの前に、同じ内容の散文がまとめて置かれている。散文が終わった後に重頌のように韻文が続く。義浄による葉事の漢訳（巻第十八）ではその韻文は省略されて訳されなかったが、チベット訳からその韻文は知られる。興起行経においては、散文が主であるが、散文と韻文が混じりあう形になっている。パーリのアッタカターも本文の韻文を説明するための散文であるが、成立が遅いため葉事や興起行経のように本文に昇格することは無かったのであろう。

興起行経では各話が独立して経の形式をとるのは、ある時代に経蔵あるいは律蔵から独立し、「如来の章」のみが単立の作品として流布するようになって大規模な編集がなされた結果であろう。本来韻文に従属する註釈的な説明文として形成された散文部分も、やがて韻文と同等の価値をもつようになると、量が大きな散文が作品の主役になり、韻文は補佐的な役を果たすにすぎなくなる。その結果、長行重頌の形式に似たかたちに再編集された。その再編集の時に10話から成る各話に経としての出だしと終りの文がつけられたものと思われる。またその再編集の際に、興起行経は、本来の話の順序を失ったのであろう。興起行経の10話の順序は、中央有部韻文とも中央有部散文とも異なっており、しかも何らかの秩序に従って並べかえられたものとは思えない。かなりアランダムのように見える。興起行経は、各話を経として独立させたので、全体の順番はいつでもよくなったのかもしれない。

中央有部韻文と興起行経韻文とがどのように独自の散文部分を有するに至ったのを考えてみると、中央有部韻文の延長線上に中央有部散文が出来、興起行経韻文の延長線上に興起行経散文が出来たと思われる。伝承する部派の内部で、韻文の内容に沿うかたちで話が勝手に拡大され、散文が作成されたのである。

中央有部散文と興起行経散文の内容を仔細に比較してみると、両者の散文はお互いを知らないまま、別々に形成されたことが判明する。つまり有部系の二

つのグループ（部派）がそれぞれ韻文に対する説明として散文を形成したが、その形成の仕方は独立したものであり、二つのグループは無接触であって互いに他方の散文の内容を全く知らなかった。そのため興起行経の散文と葉事散文は、共に同じ韻文を骨組として形成されたものでありながら、全く別箇の物語を語る。この接触のなさ、遠さが興味深い。両者がお互いを知らないのは、それぞれの散文の編集された土地が地理的に相当離れていたのか。

後の時代に中央有部韻文と中央有部散文の間には多少の内容的なずれが生じた。そのずれについてはいくつか明白な指摘がなしうが、興起行経においてはそれほどずれは目立たない。

なお H. BECHERT (1961) は、中央有部韻文への註釈として中央有部散文が出来たのではなく、散文は別のソースに基づいている、と主張する (S.205)。その意見は M7 の箇所の起源については正しいかもしれないが、それ以外は同意できない。彼は散文が韻文よりもかなり遅れて出来たことを認めないのであろうか。M7 の散文 (Nandipāla と Uttara) は有部の中阿含経 (T I, 499a-503a, Nandipālasūtra) からの借用であろうが、そのほかの散文の大部分が韻文とは別の文献として成立した作品から取られて編集されたことはありえない。散文の内容は、基本的には韻文 AT の内容を骨格として、それをうまく包み込む肉のように作られている。しかし散文は、やがて韻文に従属する説明文という位置づけを脱し、韻文とは独立した価値を認められ、韻文よりも好まれ、優先性が逆転し、葉事では散文だけを集めてまとめて韻文の前に置く形の（長行重頌的な形式への好みによる）再編集を受けたと思われる。また興起行経でも同様の過程を経て、最終的に各話ごとに長行重頌の様な形式に変える再編集を受けた。再編集されたかたちになると散文では韻文の内容への合致の義務感がゆるみ、その結果として散文が勝手に各話を成長させてゆく傾向が促進されたと思われる。散文が韻文よりもはるかに新しい成立であることは、興起行経の散文が葉事の散文と全然違っていることから知られる。散文の成立が古ければもっとその共有が諸伝承間で起こるはずである。また散文は韻文より読みやすいので、一度出来ると韻文よりも優先されやすい。韻文より散文を重んじる態度の一つ

の実例として、Kṣemendra は彼のカルパラター第50章の製作に根本有部毘奈耶薬事を参照するにあたって、韻文よりも散文に従っている。BECHERT はまた Kṣemendra がその製作にあたって中央有部ではなく西北有部の伝承に従ったと主張するが (s.205)、それは間違いである。Kṣemendra は中央有部の散文に従ったままである。

9. 中央有部散文に見られる中央有部韻文との内容的ずれ

中央有部散文は M. HOFFINGER (1990) によってチベット訳から仏訳された。薬事に漢訳もある。以下に、その中央有部散文の内容を挙げる。

M1 前世：邪悪な妻に唆されて、父の財産を異母弟に分割するのが惜しくなった資産家は、花を摘みにゆこうと森の奥に異母弟を誘い出し、石で殺した。→現世：釈尊は石の破片で足の親指に怪我をした。； M2 前世：貿易商が船で宝石島から帰航する途中、別の貿易商が成功を嫉妬して船底に孔を開けてわざと沈没させようとしたため、怒ってその貿易商を槍で刺殺した。→現世：釈尊はカディラの木の尖った先端が足に刺さって怪我をした。； M3 前世：辟支仏が托鉢して、ある資産家の妻から鉢に施食を得たが、バラモン青年がそれを見て嫉妬し、辟支仏の鉢を地面にたたき落とし、足で踏んだ。→現世：シャラという名の村で食を得られず、空っぽの鉢のままになった。； M4 前世：ヴィパッシン仏の弟子に二人の兄弟がいた。阿羅漢である兄ヴァシシュタに、出家者の弟バラドヴァージャは嫉妬し、陰謀をめぐらして、聖者が寺の召使女に高価な衣を贈ったと世間に誤解させて、その名声を失墜させた。→現世：釈尊は女行乞者スングリーの嘘によって誹謗された。； M5 前世1：五百の弟子の師であるバラモンは、五通仙人に嫉妬し、「あの仙人は愛欲の享楽者だ」という誹謗をし、弟子たちはその言葉を世間に広めた。前世2：ムリナーラは娼婦バドラーを園林に呼びだしてナイフで殺害した。彼は逃げながら辟支仏スルチの前に凶器のナイフをわざと置いた。処刑されようとする辟支仏を見て、彼は自分の罪を後悔し、罪を自白した。→現世：チャンチャー・マーナヴィカーによって咎もないのに誹謗された。； M6 前世：五百人の弟子をもつバラモンは、ヴィパッシン仏と弟子たちが供養されて上等の食事を得たのを見て、『禿頭どもには馬麦を食わせるべきだ』と語った。他の498人の弟子も、同じように語ったが、二人の弟子は、その教師を諫めた。→現世：バラモンに招かれてヴァイランバで安居した三箇月間、498人の比丘と共に釈尊は粗末な麦を食べて暮らした。しかし舍利弗と目連は上等な食を食った。； M7 前世：ウツラは親友の陶師ナンディパーラに『私は禿頭に会う必要はない。どうして悟りが禿頭の沙門にあるのか』と、カーシャバ仏を罵る言葉を言った。→現世：悟りを得るまでに、六年間苦しめた。； M8 前世：病気を三度も治してやった少年の父が治療代を払わなかったため、怒った医者には報復のため、その少年に不適切な薬を処方し、胃腸を引き裂いた。→現世：釈尊は下痢の病にかかった。； M

9 前世：漁師たちは二匹の巨大な魚を捕まえて、生かしたまま少しづつ魚の身を切って売った。魚は苦しんで声をあげたが、漁師の子はそれを見て、喜悅した。→現世：釈迦族が殺戮された時、釈尊に頭痛があった。； M10 前世：最強の力士が地方の王の力士と試合をして何度も騙されて八百長を頼まれて敗けた。騙されたことに怒り、本気で戦い、王の力士は背骨が折れて死んだ。→現世：釈尊は風によって背中中の痛みをもった。

中央有部散文（業事散文）と中央有部韻文（業事 AT）との間の内容的なずれを指摘しよう。韻文では AT4 でデーヴァダッタが悪事の責任者として出てくるが、それに対応する散文では、第 1 話（M1）において、デーヴァダッタに全く触れない。意図的に触れようとしていない。この点で散文が韻文に追従していないことは注意される。また別のずれとして、第 4 話と第 5 話（M4 と 5）で、チンチャーとスングリーの名前が入れ替わっている。これは散文の側が後から変えたのである。韻文 AT1 と AT2 がどちらもスングリーの因縁話になっている点を改良したいと考えた散文は、その M5 の今生話の下に、AT1 と AT2 の前世話を二つ並べた。その再編集の作業において、散文は M5 の今生話をスングリーからチンチャーの話にして、その代わりに M4 の今生話をチンチャーからスングリーに変えたのである。BECHERT のように散文の別起源説まで大袈裟にもちださなくても、このように説明できる。

さて中央有部韻文と中央有部散文は話の順序が全然違う。これは韻文はアト・ランダムな並べ方なのに対し、散文は分類的に並べられているからである（このことも韻文より散文が新しい証拠となる）。散文の第 1 話と第 2 話（M1 と M2）は殺人を扱う。第 4 話から第 7 話まで（M4 ～M7）までは誹謗や悪口、つまり悪しき口業を扱う。第 8 話から第 10 話まで（M8 ～M10）は職業的な罪を扱っている。

以上の内容および話の順序の相違は、ある時期から散文が韻文に従うことをやめたことを意味する。

10. AT の、破僧事の伝承との食い違い

最期に、筆者は根本有部毘奈耶業事の中にある AT の、根本有部破僧事（Samghabhedavastu）の伝承との食い違いという、興味深い事実に気づいたの

で報告しておきたい。

中央有部韻文 AT の第 4 話「妻にそそのかされて異母弟を殺した話」(AT 4) では、異母弟を殺した男こそが前世の釈尊である。しかし同じ根本有部毘奈耶にある破僧事に全く同じ話が見出される(梵文 ed. GNOLI, II, pp.184-185; 漢訳, T XXIV, 197a19-b5)。そこでは、異母弟を殺した男はデーヴァダッタの前世であり、殺された側の異母弟が釈尊の前世であったとする。この食い違いから、AT を初めに作った作者と、根本有部の破僧事の編集者は別々であり、お互いに自分の伝承の正統性を譲らなかつたに違いないという事実が知られる。

そもそも中央有部韻文は本来は律蔵文献ではない。それが根本有部毘奈耶葉事に入っているわけは、後の時代に編入されたためである。根本有部毘奈耶の伝承と AT 4 に見られる伝承とは、同じ部派内でも、別起源のものなのであろう。根本有部毘奈耶の編集者が A の伝承をまるごと葉事に組み込んだ時に、この破僧事との伝承の食い違いに気づいたはずである。もし編集者が気づかなかったとしても他の誰かが必ずそれを指摘したはずである。しかしすでに両者の伝承は固まっていたために、どちらを書き換えることもできず、そのまま両者を伝えられるままのかたちで放置したと考えられる。

しかし同じ部派内でこのような伝承の食い違いが生じた事実をどう解釈するべきであろうか。一つの考えられる可能性は、A という作品が実は同じ有部であつても中央有部(根本有部)以外の有部で作られ、後の時代にそこに入ってきた、という可能性である。もともと A は中央有部の内部で作られた韻文作品なのではなく、西北有部かその他の有部系統が作ったものを中央有部が取り入れただけなのではないか。根本有部毘奈耶は中央有部が自ら作った独自のものであつて、西北有部にはそれは共有されていない。西北有部は十誦律をもつが、十誦律は因縁話の多くを排して出来ているので、根本有部破僧事にあるような因縁話は十誦律には無い。無いから毘奈耶破僧事の伝承と衝突するという問題は西北有部では起こらなかった。それ故 A の原形は西北有部で作られたのではないか。もし中央有部が今あるような毘奈耶破僧事を形成する以前に、すでに自らの手で A 原形を作っていたならば、先に出来た A が毘奈耶破僧事

の作成に影響を与えて、上記のような食い違いは生じないのではないか。

もう一つの考えられる可能性は、A という作品は作成当時は聖典とは認められていなかったで、経蔵にすら属しておらず、そのため、同じ中央有部の内部の伝承であっても、律蔵の専門家 (vinayadhara) はその伝承の違いにあまり神経質になる必要はなかった、という可能性である。後に A が仏説として通用するようになった時代でも、律蔵の専門家はそのような作品の権威を疑い、また自分たちの律の伝承に自信があったため、あえて両者の内容を調整しようとは思わなかったのではないか。同じ部派内であっても、そのような聖典伝承の権威性をめぐる対立があったという事情も考えられる。

ともあれ、A は中央有部の律の外部で作られ、後にその律の中に異質の要素として持ち込まれたため、律の本来の伝承を保つ破僧事の記事と衝突することになったと考えられる。

※字数超過のため、本論文の注はすべて削ることにした。参照文献としては次のものだけを挙げておきたい。

Heinz BECHERT (1961) : *Bruchstücke buddhistischer Verssammlungen aus zentralasiatischen Sanskrithandschriften, I. Die Anavataptaḡāthā und die Sthaviraḡāthā*, Berlin.

Marcel HOFINGER (1954, 1990) : *Le Congrès du Lac Anavatapta (Vies des Saints bouddhiques). Extrait du Vinaya des Mūlasarvāstivādin Bhaiḡajyavastu, I (1954) : Légendes des Anciens (Sthaviraḡādāna) ; II (1990) : Légendes du Bouddha (Buddhāḡādāna)*, Louvain-la-Neuve.

H. MATSUMURA (1989) : “Preamble to the Anavataptaḡāthā”, *Buddhist Studies*, 18, pp.125–160.

K. WILLE (1990) : *Die handschriftliche Überlieferung des Vinayavastu der Mūlasarvāstivādin*, Stuttgart.

エチエンヌ・ラモット (1978) : 「『大智度論』の引用文献とその価値」, 『仏教学』 5号, 1–25頁。

岡野潔 (2007) : 「Kḡemendra の Daśakarmaplutyavādāna——Bodhisattvāḡādānakalpalatā 第50章の校訂と訳——」, 『南アジア古典学』 2号。

An Essay on Formations of the Buddhāvadāna of the Anavataptagāthā and its Parallels

Kiyoshi Okano

[Abbr. :]

AT-verse	= Verses of Anavataptagāthā Tathāgataparivarta
AT-verse-MS	= Verses of Anavataptagāthā of the Mūlasarvāstivādin
AT-prose-MS	= Prose portions corresponding to AT-verse-MS
AT-KS	= Anavataptagāthā of the Kāsmīra-gandhāra Sarvāstivādin
Chin I	= Chinese Translation of Bhaiṣajyavastu (Taisho No.1448)
Chin II	= The Sūtra Taisho No.199 五百弟子自說本起經
Chin III	= The Sūtra Taisho No.197 興起行經
Chin III-prose	= Prose portions of the Sūtra Taisho No.197
Chin III-verse	= Metrical portions of the Sūtra Taisho No.197
Mppś	= 9 karmaploti stories including the sūnyapātra story in Mppś
P	= Pubbakammapiḷoti in the Pāli Apadāna
Ur-P	= Sarvāstivādin's original text of the Pāli Pubbakammapiḷoti
Archetype	= Previous form of karmaploti stories of Mppś before the addition of the sūnyapātra story, namely 8 karmaploti stories
Ur-AT	= Previous form of the tree texts of AT-verse (AT-family)

[Schema :]

Archetype → Ur-P → Ur-AT → AT-family
(AT-verse-MS, Chin II and Chin III-verse)

P, Chin II, Chin III-verse and AT-verse go back to a common archetype (“Ur-P”).

Chin II, Chin III-verse and AT-verse-MS form a group (“AT-family”) and they derive from a common hyparchetype (“Ur-AT”) which is distinct from that of P.

A characteristic difference of Ur-AT from P is additions of pādas in 6 places by the same way.

Three texts of the “AT-family” (and Ur-P, that is the previous form of P without additions of 2 stories) have a common frame, which consists of ten Buddha's karmaploti, i.e. the connections between acts and results. This frame (“daśakarmaploti-structure”) goes back to Ur-P. Neither three texts of the “AT-family” nor Ur-P knows the sūnyapātra story of the Buddha (the story No. 9 of Mppś). The addition of this sūnyapātra story is a feature of AT-KS.

Chin II is very close in relationship to AT-MS and undoubtedly belongs to the tradition of the Mūlasarvāstivādin. Chin III-verse originally belongs to the same source (= Ur-AT) as AT-MS and Chin II, but we can't know what sthāvira-school developed later metrical and prose portions of Chin III.

Chin III developed its metrical portions in a peculiar way by adding new pādas or verses to the base text of Ur-AT.

Chin III-prose grew in no contact with AT-prose-MS. It is sure that tale-tellers of Chin III-prose did not know at all the tradition of AT-prose-MS, and vice versa. Therefore Chin III does not belong to the Mūlasarvāstivādins.

Heinz Bechert's opinion (S. 205) that in Daśakarmaplutyavadāna (Chp. 50 of the Kalpalatā) Kṣemendra made use of AT-KS, is false. Neither AT-KS nor AT-verse-MS is the source of the Daśakarmaplutyavadāna, but AT-prose-MS.